

鑑賞と表現を融合した音楽ワークショップが 児童の音楽に対する態度に与える影響

— アンケート調査及び半構造化面接に基づいた考察 —

小野隆洋, 岩中貴裕

1. はじめに

近年、講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が主体的かつ協同的に参加することを重視したワークショップ型授業が注目されている(中野, 2001)。とりわけ、第一著者が音楽演奏家として17年間に亘って従事してきた文化庁主催の芸術家の派遣事業にみられるように、様々な教育現場においてプロの音楽家が行う出張実践「音楽アウトリーチ」が増加している。現場の教員たちは、「本物に触れることが子どもの心を豊かにする」「クラスや学校の雰囲気が大きく変わる」と高く評価する一方で、過去の望ましくない事例から音楽アウトリーチに対して抵抗を示す管理職も少なからず存在する。この背景に、音楽アウトリーチ実践に関する研究知見が乏しく、経験則にもとづく評価が主流となっていることが指摘できる。その結果、教育的意義が不明確なままワークショップ型授業が乱発されて教育現場に混乱が生じている(新原, 2017)。音楽のワークショップ型授業に関する研究は近年になって着手されるようになった領域で、音楽教育学においてはワークショップ型授業における鑑賞活動と表現活動の結びつきについて検討されている(坪井, 2019)。一方で、研究が縮こつたばかりで、個別の専門領域で研究されるにとどまり、その学際性をいかにした知見の相互交流や体系化が今後の課題である。そこで本研究では、教育的意義の観点から音楽鑑賞活動と音楽表現活動の2つの活動を横断することで育成される資質・能力に着目する。効果的な音楽ワークショップの在り方を検討するとともに、鑑賞と表現を融合した音楽ワークショップが児童の音楽に対する態度にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 研究方法

アンケートと半構造化面接によってデータ収集を行った。収集した3種類のデータは以下のとおりである。

一つ目は、文化芸術活動に参加した児童に対して行ったアンケートである。文化芸術活動に従事した785名の児童がこのアンケートに回答した。これによって児童の心的態度を明らかにすることを試みた。

二つ目は、半構造化面接によって収集した定性データである。筆者が文化芸術活動を行った小学校に勤務していた5名の教員を調査協力者とした。これによって、文化芸術活動が児童の内面をどのように変容させたのかを解明することを試みた。

三つ目は、文化芸術活動に参加した児童による自由記述文である。文化芸術活動体験後に、児童は思ったこと、感じたこと、感想等を自由に記述した。これによって、調査参加者が文化芸術活動に対してどのように思っているのかを明らかにすることを試みた。

3. 研究成果・考察

(1) 調査1

平成30年6月～12月迄の期間に、芸術家による鑑賞会やワークショップなどの文化芸術体験事業を実施した小学校の児童7,158人のうち、785人に対して事業終了後にアンケート調査を行った。アンケートでは質問項目を5項目に定め、リッカート5件法によって回答を求めた。アンケートの内容を表1、結果を表2に示す。

表1 調査1で児童785人に対して行ったアンケートの内容

	1	2	3	4	5
Q1 おんがくかみいは、たのしかったですか	それほどでもない	すこしたのしかかった	まあまあたのしかかった	かなりたのしかかった	すごくたのしかかった
Q2 がっきのしくみが、わかりましたか	ほんのすこしわかった	すこしわかった	まあまあわかった	かなりよくわかった	すごくよくわかった

Q3 さつきよくのおはなしは、わかりましたか	ほんのすこしわかった	すこしわかった	まあまあわかった	かなりよくわかった	すごくよくわかった
Q4 がつきをえんそうしてみたくになりましたか	それほどでもない	すこししてみたくなった	まあまあしてみたくなった	かなりしてみたくなった	すごくしてみたくなった
Q5 まえよりおんがくがすきになりましたか	それほどでもない	すこしすきになった	まあまあすきになった	かなりすきになった	すごくすきになった

表 2 調査1で児童 785 人に対して行ったアンケートの結果 (割合)

	1	2	3	4	5	合計
Q1	0.6%	0.9%	1.8%	8.4%	88.3%	100%
Q2	1.8%	2.8%	12.5%	29.6%	53.4%	100%
Q3	2.4%	4.3%	13.8%	24.7%	54.8%	100%
Q4	1.5%	2.3%	4.8%	14.8%	76.6%	100%
Q5	2.5%	1.9%	7.5%	14.6%	73.4%	100%
総計	1.8%	2.4%	8.1%	18.4%	69.3%	100%

(2) 調査 2

文化芸術体験事業実施校に勤務する教師 5 人を調査参加者として、半構造化面接を実施した。芸術表現活動 (Artistic expression activities) が子どもたちの内面的変化に与える影響と、その影響が創造力・想像力、思考力、コミュニケーション能力の向上に貢献するのかを明らかにするために以下の質問項目を定めた。

- (1) 普段、この学校の児童は音楽の授業を楽しんでいますか。
- (2) 先日、児童の様子を観察していて何か印象に残っていることを教えてください。
- (3) 文化芸術体験事業を通して児童たちにとってどのような変化があったかを教えてください。
- (4) 音楽の授業はどうか。事業前と比べて何か変わった点はありませんか。
- (5) 文化芸術体験事業を通して、向上、あるいは成長したと思われる能力はありましたか。
- (6) どのような行動、または言動から、その能力 (問 5 で答えた内容) が向上したと考えられますか。

収集したデータを分析した結果、調査参加者が勤務する学校は、いずれも日頃から音楽に重きを置いている傾向があることが確認できた。文化芸術体験事業を通して、これまで身近ではなかった音楽の生演奏に関わりを持ったことで、事業実施後には音楽を聴く際に、音の強弱や速度等の着眼点を児童が見出して、鑑賞能力及び表現能力が向上した傾向にあることが調査参加者の発言から明らかになった。芸術家の芸術表現活動を、間近で鑑賞したことによって児童が触発されて、自身の芸術表現活動に対して意欲的に取り組もうとする肯定的な態度が育まれたことが示唆された。

(3) 調査 3

調査 1 と同一の調査参加者 785 人から得られた、文化芸術体験事業に参加した感想等の自由記述文を文字データ化し、収集したデータを KH Coder によって使用語彙頻度を明らかにした (樋口, 2014)。語彙の共起ネットワークを図 1 に示す。

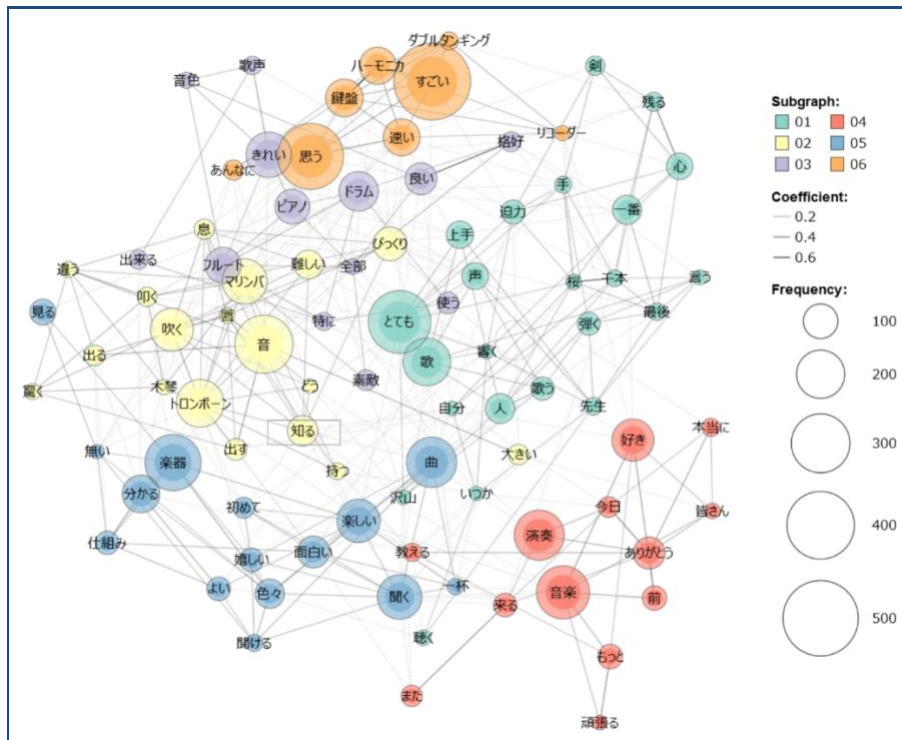


図 1 児童の自由記述文 (785 人分) における共起ネットワーク図

4. まとめ

本研究では、鑑賞と表現を融合した音楽ワークショップが児童の音楽に対する態度にもたらす影響を、アンケート、及び半構造化面接によって明らかにすることを試みた。収集したデータを分析した結果、児童の音楽に対する意欲が向上し、積極的に取り組むようになっていたことが半構造化面接の調査参加者の発言によって確認できた。アンケート調査によって、事業実施前よりも児童の音楽に対する好意度が高まったことも明らかになった。これは、調査参加者が自分自身と音楽との間に深い関係性を見出した結果であると筆者らは解釈している。事業を行った 6 名の音楽家が、ティーチング・アーティスト (以下、TA) の役割を担ったと考えられる。TA とは、芸術を教えると同時に、芸術を通して人を教育することを仕事としている人のことである。Booth (2009) は、学習者が芸術作品と自分自身とを関係付けられるように支援することを TA の果たすべき重要な役割として挙げている。本研究において実施した音楽ワークショップにおいては、6 名の音楽家が TA としての働き掛けを行い、児童が音楽と自分自身との間に深い関係性を見出したと考えられる。児童が芸術作品に心を通わせる切り口となるエントリーポイントに導かれたのである。これにより作者や作品に対する理解が深まり、音楽に対する苦手意識や劣等感が払拭され、音楽に対する肯定的な態度が養われたと考えられる。

参考文献

新原将義 (2017). 「ワークショップ型授業における教授・学習活動の対話的展開過程」『教育心理学研究』, 65, 120-131.

坪井眞里子 (2019). 「音楽鑑賞と表現活動における一考察：アウトリーチ活動の実践記録をもとに」『名古屋女子大学紀要 (家政・自然編, 人文・社会編)』, 65, 359-372.

中野民夫 (2001). 『ワークショップ：新しい学びと創造の場』 東京：岩波新書

樋口耕一. (2014). 『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』 京都：ナカニシヤ出版

Booth, E. (2009). *The music teaching artist's bible: Becoming a virtuoso educator*. Oxford, UK: Oxford University Press.